

日清・日露戦争の軍役夫

沖野 奈加 仕

「軍」という字は車という字でなりたっている。軍に送（しんにゅう）で運という字になる。運送業の発達は軍事輸送によるところが多いといわれるが、車軸の油を断つたため軍隊と物資の輸送が遅れ戦いに敗れた、それで「油断大敵」ということわざができたという。

「城」という字は土へんに成と書く、城には堀があり土へんである。石垣、砦（とりで）など、土と石、櫓（やぐら）など木へんの字と建築、建設もまた戦争と深いかわりのあるものが多い。

戦争の歴史は多く書かれており、運送の歴

史も多く書かれているが、誰が運送していたか、馬方、仲仕、人夫の歴史は書かれていない。書かれていても、ゆがめられたもの、興味本位のものでしかない。

建築、建設の歴史にも同じことがいえる。施工者の大名や普請奉行、せいぜい棟梁のことぐらいである。

「肥後の石工伝」という演劇で、城ができたあとで城の秘密を守るため刺客におそわれる話があるにしても、本当に城をつくった人から出された百姓の土持、村木、石などを運んだ人、石工、大工、左官などのことは書かれていたとしても物語のエピソードとして扱

われている程度である。

土方、馬方、人夫、仲仕の歴史がなぜ正しく書かれなかったのか、民衆の力の偉大さを書くことは権力者にとって都合が悪いからか、歴史学者や文学者が権力にコピたのか、知らないのか、労務者が自己の歴史を記録するところがなかったことはいなめない。なぜ労務者が書かなかったのか、書けなかったのか、そういうせんさくは理屈っぽくなるので、ここでは抜きにして、日清、日露の戦争と労務者のことを探検してみよう。

日清戦争(明治二十七八年)の軍役夫

環状線玉造駅から西南に向って、商店街とバス通りを横切り五百メートルぐらい三光神社を目標に行くと、その裏山一帯が真田山で昔、真田幸村が陣をしいたところだという。ここに旧陸軍墓地がある。

西南の役(明治十年)から日中戦争の頃までの戦死者の墓が五、八〇〇ほどあるが、そ

の墓地の一角、一段低いところに「軍役夫」の墓が約九百五十ほど並んでいる。

ここにあるのはほとんどが日清戦争で死んだ軍役夫の墓である。

「軍役夫」とはいったいどういう仕事をして

いた人たちであるか。墓碑に刻まれた職名をみると、「軍役石工」「雇 鉄工」「臨時

台湾鉄道隊雇員」「鉄道工夫」「鉄道隊馬丁

「雇靴工」「兵 倉庫付傭員」「軍役人夫

「陸軍看病人」「軍役職工」「陸軍馬丁」「

陸軍磨工」「酒保受貞人」「兵庫丸舟夫」「

姫路丸疋方」「東英丸水夫」「土佐丸火夫

「東海丸乗組人夫」「品川丸 取」「軍役夫

頭」ざっとみたところかういうところで大

多数は「軍役夫」と記されているだけである。

ここで当時の世相や物価など若干の資料に

よって軍役夫とはどういう人たちがなったの

か。昭和一二年九月十日に発行された雑誌「

上方」に記載されているものを引用させても

らう。(「内はいずれも引用部分である」)

戦争になると物価が上るのは今も昔も変わりはないが、当時はどうであったか。

	明治二六年	二七年	二八年	二九年
米	六円四〇銭	九円八〇銭	八円六〇銭	八円六〇銭
酒	十四銭	十五銭	十九銭	二〇銭
ウドン玉	一個	五厘	七厘	七厘
塩	一俵 (七貫目)	十八銭	二二銭五厘	三二銭五厘
日雇農夫	一日	十七銭	十七銭	二〇銭
日雇農夫 (女)	一日	十銭	十銭	二〇銭
日雇大工	一日	二五銭	十二銭	十三銭

これは一農家の家計簿の一部であるが大工賃が二七年以降記載されていないのは戦争による人手不足と思われる。

「明治二七年の大阪の貧民は三万六千六百七十人、八四八七戸、米価とうきしたため貧民は苦しむ・・・」

「八円の月給でかいバリアをさるな。米の相場が十二円、差引四円の不足あらば酒にも酔えん(四円)じゃないか」
 巡査の月給八円をひやかしたこんな狂歌がはやっつた。

前記農家の家計簿による米価とくらべると都市の物価上昇はひどかったようだ。

こうした戦時不況下に軍役夫が募集された。一日清戦争当時には軍夫というものがありまして・・・水色の縮入の半被(ハッピ)を着た軍夫が・・・五十人頭、百人頭と襟に記るされた親方連の中には白木綿で包んだ日本刀を背にして・・・」
 「・・・小作百姓の家をどはワラジを献上(ワラジは軍用人夫にはかせるため)・・・」



(雑誌上方にえがかれた軍役夫の姿)

こうした服装で戦場におもむいた軍役夫を迎えたものは何か。

「明治二八年一、二、三月における日本軍の死者一万三四八八八、うち病変死一万二〇七一人」
 「・・・この部隊の食糧米百五十俵梅干三十樽・・・」
 「れ脚気で全身ぶくぶくになり二日後に死んで行った」という戦友の話は、後の第二次世界大戦において、ピタミン不足や栄養失調で体がむくんだ戦時浮腫を患わせる。

ここで再び軍役夫の墓に刻まれた碑文によって死因を確かめてみよう。

約八十年前の水成岩の墓石でかなり風化して読めない部分がある。後で訂正したのは夏の日中であった。それで読めない部分をチエックしておいて、朝日のあたる時間、夕日の時間、曇天、雨上りと何回も訪れたが、それでも読めない、古い記録でもあればそこで思い出したのが、数年前、他のことで碑文が読めない、古い記録でもあればと思つて平野のある寺の坊さんにたずねたとき、暗い夜にロソクの光をあけると、光度が弱いので石の表面だけしか照らさないから少しのくぼみでも見える」と教えてもらったことを思い出して、月の出たある深夜試してみた。そして教えてもらったことがほぼ事実であることを知った。

九百五十もの墓碑を全部ここに書くことはできないが、年、月、日こそちがえ同様のものが多いので次にあげてみよう。

「朝鮮国仁川兵 病斃死」
 「広島県似島 時陸軍検査所避病斃死」
 「台湾ヨリ後送中病

院船高砂丸於海上死」「清国除家屯避病院死」
など病院とくに避病院、検疫所、隔離病舎の
伝染病が多いのは、いかに衛生状態の悪い待
遇をうけていたか想像できる。

「軍役夫松本辰蔵 明治二八年一月二日
清国大東溝至大影？山ニ於路上死」前述の如
くワラジばきで行軍中、冬の中国北部「路上
死」凍死であろうと思われる。

ところで船に於いての死因となると陸上と
は少しちがったものがある。

次に○印をつけたものは日本郵船（三菱）
が日清戦争に御用船として陸海軍に提供した
ものである。

○「東海丸乗組水夫 濱口勇 海中死」○

「土佐船内死」○「軍役夫 清水幸吉 明

治二八年三月二二日於鹿児島丸船中死」（他

同船の死者の分あり）「軍役夫 井戸亀太

郎 明治二八年四月十一日 清国大連ヨリ馬

公港に向航海中水中死」○「軍役夫 奥田

旅吉 航海中大連丸船内死」○「軍役夫

武田伊之吉 明治二七年十二月八日住之江丸
船内死」○「軍役夫 井崎吉之助 明治二
八年九月二七日報国丸船中死」 「軍役夫
亀井亀太郎 明治二九年一月一日於清国威海
衛港内死」 「明治二八年十月十五日宇品院
泊中神州丸死」

このように海中死、船内死が多数ある。
船内荷役が危険作業であり、死亡事故の多
いのは今日も変りないが、荷役機材の悪かつ
た昔のこと、まして戦場ともあらば今更
多言を要することはない。

以上○印をつけたものは日本郵船のもので
あるが、大阪商船もかたりの数の船を日清戦
争に供用している。

次に昭和十年発行の「日本郵船五十年
史」に於り日清戦争と日本郵船の関係を「
内に引用してみよう。九百五十ページに及ぶ、
ほり大なる資料で日清戦争の部分だけでもかな
りの部分ですべてを収録できないので主たる
ところを抜すいとどめる。

「日清戦役に於ける当社御用船の業績、御用
船六六艘 人を運ぶ五二万人、馬を運ぶ四万
頭（一二〇頁）」

「戦況拡大と共に御用船の不足せんことを顧
慮し、開戦後直ちに船舶購入に着手した元山
丸（他略）の九艘を軍用に供せり」（一二一
頁）」

「陸軍御用船は五三艘、兵馬糧食運送の機関
となり、一年有余の間敵艦出沒の危険と狂瀉
流水の 難とを凌ぎ、航路未詳の海洋に航行
し、克くその任を完りし得たり（一二三頁）」

「海軍御用船は一三艘 山城丸、近江丸は水
雷艇母艦として、西京丸は報知艦、相模丸
は供給艦として、武装して其任につきたり（
一二四頁）」

「論功行賞の際 社長吉川氏、近藤氏に勲三
等に叙せられたる外、御用船事務に關係せる
諸員陸海を通じて三百九十余名叙勲或は賜金
の光榮に浴したり（一二六頁）」
「当社は其本来の使命たる兵商二途の目的を

達成するは此秋に在りとなし、満腔の熱誠を
以て軍國の急に応ず（一三一頁）」

「資本金の増加、時に当社は此一大事の遂行
を助くる好機因に達着せり、其一は日清戦役
における御用船の利益金を臨時に積立得たる
を以て其中より相当額を該費途に利用し得る
こと（一三六頁）」

参謀本部日清戦争史による陸、海軍の使用
した御用船と輸送人馬等のうち（○内は日本
郵船扱である。

陸軍の使用した汽船 百十二艘（五十三艘）
内地より輸送した人員三十六万一百人、内地
に送還した人員二十七万一千五百人（この差
が戦死者一注）計六三万一千六百人（五二万
二千余人）馬は五万六千一百頭（四万頭）海
軍の用船二十四艘（十四艘）

以上の数字を見ても日本郵船の日清戦争に
果たした役割、戦争でどれだけ太つたかは「
で引用した部分をもよくわかるが、ここ
で再び日本郵船五十年史をみてみよう。

「陸軍大臣は明治二七年六月及十一月、および同年九月、十月、および一万八千屯に相当する船を、当社名義をもって購入すべき旨命令せられたり。よって海外各地に相当汽船を物色し、汽船十四艘を購入して政府に引渡したり。：：陸軍九艘、海軍五艘：：是等の諸船は軍事上の必要やみたる後は、当社に於て買受くる約束をもって、それ迄の間政府より貸下船として当社に委託せられたり。」

「是等多数の貸下船に対し一時に乗組員を補充せんことは、海員不足の折柄極めて困難にして、ついにやむを得ず海外より海技者を雇入れ、又水火夫等は日本海員 済会を煩して辛うじて其急をしのぎたり。」

ここででてくる水火夫というのが、はじめの方の軍役夫の基にある「東海丸乗組水夫」「土佐丸乗組火夫」「品川丸船取」などのことである。しかしほう大を日本郵船五十年史のどこにもこうした人たちの記録は見当らな

日清戦争後に、解雇軍夫救済会というものが出来て、寄付金を集めたということが他の雑誌にわずかに記されているにすぎない。次に従軍記者として日清戦争に参加した俳人正岡子規の従軍俳句のうち「海戦」のなかから数句を次に記しておく。

すさまじや弾丸波に沈む音
船焼けて夕映えの雁乱れけり
船沈みてあら波を砕く哉

秋風の渤海湾に船もなし
秋あれて血の波さはぐ巖かを

この後明治三三年の北清事変に日本郵船からは十四艘の汽船が参加し、明治三七、八年の日露戦争には七十四艘が参加している。

日露戦争(明治三七年)の軍役夫

前章日清戦争では日本郵船を主として書いたので、ここでは日露戦争で大をなした大林組のことを書いてみよう。

大林組は明治二五年の創業であるから二七年の日清戦争当時はまだ世間に知られるほどのものではなかった。

日清戦争後の景気上昇によって、当時大阪が近代工業化してゆく、とくにもとと河内木綿の産地をひかえ輸物業が多かったので紡績工業が発展していった。

また工業の発展につれて鉄道が発達する。大林組はこの時代に多くの紡績工場や各種の工場、鉄道工事を請負って急速にふくれ上ってくる。

この日清戦争当時に地元建設業として大きくなっていったものに 池組、銭高組、松村組、つづいて関東から進出してきた大倉組(現大成建設)、清水組などがある。

日清戦争当時は輸送手段が人力、馬力にたよっていたので多くの軍役夫を使用した。前章軍役夫の墓に馬丁、鉄工などがあるのがそれであるが、これらの人夫集めには広島と大阪の土木業者があたった。これは人夫の募

集と労務管理に経験が深かったためである。

日清戦争から十年、明治三六年ごろから日本とロシアの政情が深刻化してきた。すでにそれに先立つ明治三十年から日露戦争を予知し、市の工業都市化とともに大阪港の築港工事がはじまった。

この工事に大林組は防波堤のブロックをつくる敷地工事、ブロック用材の砂利納入などを請負っている。

この工事は長期にわたるもので途中で日露戦争が始まるのである。

明治三七年二月、日本海軍はロシア海軍の基地である旅順港の入口に多数の船を沈めて港を封鎖しようとした。

日本郵船はこのとき十艘の船を爆沈させているが、この沈船にあたり船内に多数の石塊とセメントを積込んだのである。

これは軍の秘密作戦であるため、作業を偽装するため大阪港の築港工事場で行なったが第一回 三回までの作戦で、このうち第一回

の四艘、第二回の五艘、第三回の十三艘を大林組が行なった。途中で情報がもれるのを恐れ兵庫県の家島で作業を行なった。

また陸軍は朝鮮に軍用鉄道工事を行なったが、開戦より数年前、明治三四年から大倉、鹿島、間その他の組が入っていたが、三七年の開戦直後大林もこれに参加している。

このときまでは大林店と称していたのを軍の要望で大林組となり軍役夫の半被にも襟にも大林組と染抜いた。

明治三七年一月には第四師団（大阪）から軍役夫五千名の供給を命ぜられている。

大林組と軍との関係は急速に拡大し、朝鮮ではロシア軍からとりあげた木材を製材して鉄道の枕木にする工場を建設したり陸軍の兵舎、工廠、病院、新設師団などの工事を次々と請負っている。

大阪では浜寺海岸に二万名のロシア軍捕りの収容所工事を突貫工事で行なっている。このように日露戦争においても多数の軍役

夫が使用されているが、日清戦争の軍役夫の墓のようなものは見当たらないので、日露戦争の軍役夫がどのような犠牲を払ったのかはわからない。

日清戦争から十年後急速に帝国主義化していった日本では、すでに軍役夫などは消耗品としかみられぬようになっていたのであるろうか。

付記II第二次世界大戦においては徴用工というものがあって陸、海軍の工廠や軍需工場に強制連行されているが、兵士として使えぬ中、老年の店主などが徴用され、妻子と別れて、寄宿舎生活をしていたが、当時II徴用工が人間ならばチョウチウ、トンボも鳥のうちIIなどと人間扱いしていなかった。さらに、太平洋、南方の島の日本軍の飛行場建設には刑務所の服役者を刑期を三分の一にしてやるとだまして連れて行ったが、劣悪な生活状件と空襲などで半数以上が殺されてしまったと、かろうじて生きのびて帰ってきた人の話をきいたことがある。

編集後記

● 夏更の暑いときに取材に行ったり記事が秋風の冷たくなる度にやっと発行ということになった。創刊当初は毎月八日発行にこだわっていたのが、いつのまにかおくれた。

ゆき乍らものを書くというのは大変なのだ。だから労働者の歴史、本当の姿が書かれなかったのだと思ひ直して、昏問の仕事でやけた目で書く、螢光灯の光がイヤに暗い感じ、すぐ眠くなる。それでも書く、書かねばならない。誰か書いてくれない、俺たちの歴史は俺たちが書くしかないのだから。

◎ スミマセン、エライオクレテ (沖) (T2)

《労働者度世》第十八号

一九七六年十一月一日発行
労働者度世編集委員会
大阪市西成区菟茶屋三丁六十五番地
釜ヶ崎生協 発行

販売所

《労働者度世》

- 釜ヶ崎生協 三軒公団西、安定西の通り、早う、夕比、食料品の店
- かとう ションベンガード東へ抜けてすぐ右側、新興・雑居の店
- ④ 細産區、「安い屋」並び、新興雑居の店
- 千石書店 パチンコ「ニッポ大阪」東へ、新興筋商店街南側
- いこい食堂 西成Kサンウラ、公団北側の食堂
- 大阪労働 中と島朝日ビル七階手4局
- 長瀬書店 東京・山谷、パレス裏の方、西本と雑居の店